京定十六利陞

完

完政十

へ13
2946
55

55
へ13
2946
55

京傳主十六利鑑序

阿羅漢の形容箇々一様なるべ。鐸とらして夜
ごとに。鉢とあげて食とこひ。虎と養ひ龍を云月
生ぜるあり。或ハ聾或ハ笑亦是人間世と
營に一般人の心動もすしバ喜怒哀楽に迷惑して
種々様々の形容をふし。権も静なるべ。これを言
うつし。言ふいぶるべ則這稗史の如なるべ書肆
余が愚名を以て這書に戯号ます。いとをぐら
尓云。

寛政十一年
己未春

醒世老人京傳識

十六ノ
羅漢と仏菓子ハ
ハ
ハ

欲連
えんや損者
金之番

我慢損者
十八つまん
水

借越損者
貪須盧損者

奢羅積者

小利大損者

棒陀羅撙者
不齢歯酒入山門

怪氣損者

じゃけんそんしゃ
邪見損者

遊者
損者

短気乱者損者

堪忍

煩悩損者

朝寢者損者
「まぢめさうなかほつきでもなかなかのんべぇ
「ものしりぶるやつ
「ものしりこのあさ
「ものしりこのあさ
「ものしりこのあさ

多辯損者

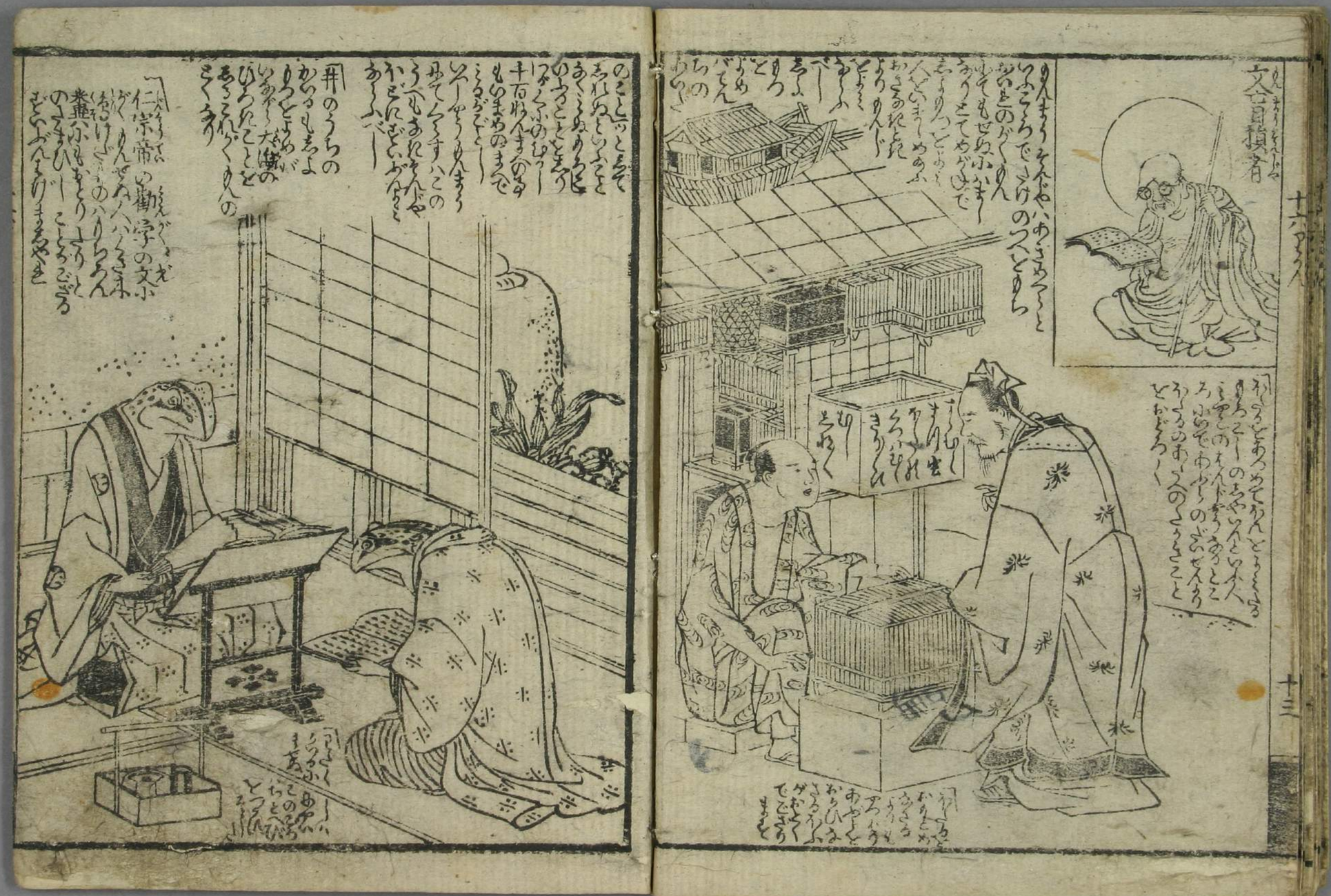
たべるくいざごんうそと
てまりのあれざごんそんじゃハ
くさらさとのつて
うそつく
ちさとぬく
べしといまーめあハ
くちハけぶりしひの
ねありこめるさこへ
のことういちごんの
ことばゆて人とそこ
あひ男とゆることと
わかし

あんさこのうで
のおひとこもも
まもうがのまハ
あいさうさあれ
ろくろくびて
ぎよござりま
べらやく
くらや
べらや
くらや
べらや
くらや

こぎりまるのさ
ひ社七八でも
ろろしものく
ろさ
ござり
らも

ふむとのの
ぎのうきこ
もうハ八ろう
くちのぶ八
ぎそ
べらやくらや
くしやべらや
くくく

こうのくハ
くちびる
こしー秋の色
ことこざんと
いのあるくる
なるこのく
あり女ハ
ぶして
たごんも
くれくも
こだえハ
そんじゃ
つーくー
さまく



文盲損者

仁宗帝の勸学の文

迷者慎者

十六

悟

十七

迷

京傳店紙をこゝに
ろひれんくちんぎ
くふう仕ゐところ
ろうれんハろうして
やっぱりこまえんぎ
夏中ハ人ろうゆ
アホウノ出来仕ゐ

佛門元自導昏曹
比論香花方便燈
相照新圖羅漢像
京傳前世一狂僧

京山陳人題

山東京傳作